

タイトル：中東☆イスラーム教育セミナー（第18回）

日時：2022年9月15日(木)～2022年9月18日(日)

高橋信哉（東京外国語大学総合国際学研究所）

新型コロナウイルス感染症拡大にともない状況によっては zoom のみでの開催となるのではないかと懸念しておりました。結果的に、ハイブリッドで対面も交えた開催となって安堵致しました。久しぶりに専門分野が異なる大学院生の発表や先生たちの講義を聞くことができ貴重な時間を過ごすことができました。

今回は、「So what? (そもそも何)」「横断的研究」「具体と抽象を糸でつなぐ」、「諸問題は多層的につながっている」などの項目ができました。これらは研究活動を行う上での根幹となり、今後も肝に銘じて精進していきたいと思っております。

今回学んだことは、「その人にしかできない研究」が「独自性と独創性」へとつながっていくということを学びました。通常、逆のように捉えられる傾向にありますが、真理は先述した構造にあると認識しました。さらには、それが、社会的に価値のある研究へとつながっていくのだということも学びました。そのためには、普段から「自分は何に関心があり」「何を成すべきか」という感覚を研ぎ澄まさなくてはなりません。その上で、先人が積み上げてきた業績をもとに、自分にしかできない研究を行い学問の発展に寄与していけたらと思っております。

もともと学問は、諸説ありますが、宗教に端を発し、哲学に収斂され、自然科学に分化していきました。欧州の大学のディシプリンや学部構成もそのように編成されています。昨今、その分化が、学問発祥・草創期のように、統合化していく兆しが見られます。それと同時に大学の役割も様変わりし、大学は、「知の貯蔵場」ではなく、「知のプラットフォーム」として、世界や社会に向けて様々な発信を行っていかなくてはならないのではないかと感じました。

AI 開発の動向を見ているとデータアルゴリズムベースの研究において人の認知の壁が存在することが分かります。それは、数理モデル積み上げて「計算の結果こうなりました」と提示されても誰も検証はできません。つまり、人間が認知出来ない領域が出てくるということです。その時、もう一階層上のメタな部分で概念化する人達が必要になります。その言語概念系の分野を担うのが文系の研究者にあたります。つまり、AI が導き出した解答に対して、社会科学によるストーリーを構築し、人間が納得する回答を導き出すということです。これまで、大学教育は理系に多くの国家予算が割かれていて、文系軽視の傾向が続いてきました。文系の社会科学が今後ますます必要になってきます。伝統的な当教育セミナーの横断的な交流、議論の場は、今後も永続的に続いてほしいと切に願います。

最後になりますが、zoom とのハイブリッド開催につき「音声」、「会場間の連動」、「カメ

ラワーク」など、準備のみならず、当日のご対応は、大変だったかと思ひます。そして対面ではない起きえない事象も随所で発生したかと思ひます。

ご準備及び運営に携わっていただいた野田先生をはじめとするA A研の先生方、千葉さんに深謝申し上げます。